

特集

臨床医に必要な小児骨疾患の診断上の諸問題

Some Items in The Diagnosis of Pediatric Bone Diseases for Clinicians

特集を企画するにあたって

大場 覚

名古屋市立大学医学部放射線医学講座

Satoru Ohba

Department of Radiology, Nagoya City University School of Medicine

小児の骨は絶えず改変し、成長している。したがって、小児期の骨の解剖、生理を十分考慮に入れて、骨疾患を理解していかないと判断を誤り、骨の成長を狂わせることにもなりかねない。これらの理解を深めていただくのが本特集のねらいである。

小児の骨はしなやかであり、骨折そのものが指摘し難いことが多い。また治療もその後の骨の成長を考慮することが求められる。さらに昨今、日本でも小児虐待が増加しているといわれているが、それを見抜くのは不自然な部位の骨折であるかもしれない。

小児の骨の画像診断は単純X線診断が基本であることには、現在も変わりはないが、しかし、骨髄、軟部の疾患に関しては、その診断や進展範囲の評価はMRIでないと困難である。特に、小児の骨髄は成長過程にあるので、その生理的变化を理解しておかないと、白血病をはじめとする骨髄疾患の診断や進展範囲の評価を誤る可能性がある。また、小児の急性骨髄炎の際に臨床症状に遅れてX線所見が現われ、それを診て診断し、治療をするのでは遅すぎる。臨床医が症状から骨髄炎であることに逸早く気が付く

か、あるいは、MRIを緊急的に行って診断し、治療が遅れないようにしなくてはならない。

小児の骨腫瘍を取り上げたのは、多くの良性、悪性骨腫瘍が小児期にピークがあるからで、中には、骨の成長とともに正常の骨に変化するものもあるし、逆に、良性骨腫瘍を悪性腫瘍と間違えて、不要な手術を強いられることもある。不要な医療を避ける意味からも、正しい知識が必要である。

小児では、実際的には骨の奇形や先天性骨系統疾患が多いと思われるが、前者は直接生命を脅かすこともないので、専門の整形外科医に紹介すればよいものである。先天性骨系統疾患は症候群を形成しやすく、多臓器に病態が存在しやすい。小児に携わる臨床医には必要な領域ではあるが、病態が骨のみに限局しないことも多いので、敢えて今回の特集では取り上げず、他の機会に譲ることにした。

最近、小児の医療訴訟が増加してきているし、小児虐待も増加している。われわれ臨床医は小児を心身ともに立派に育てあげる一助を担っている。臨床医の責任は高まるばかりである。この特集がその一助となれば幸甚である。